

暑い夏が終わりを告げたのか、朝晩は涼風が吹き、虫の声が日増しに大きくなってきました。現在会員登録数 1,523 人さま。ご愛読ありがとうございます。次号は 10 月 21 日発行の予定です／

◆◆◆ 目次 ◆◆◆

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》ＹＯ！この本読んだ？ Yasuko's & Okiko's Talk

《2》読書活動ボランティアのためのワンポイント 49

《3》サイト紹介 ー子どもの本をリサーチするー

《4》行って来ました！

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

【1】お知らせ

● 実演と講演会「懐かしの街頭紙芝居～少年ローン・レンジャーとその時代～」

日 時：平成26年10月13日（月・祝） 午後2時30分～4時45分

場 所：大阪府立中央図書館 2階大会議室（東大阪市荒本）

内 容：街頭紙芝居の実演 「少年ローン・レンジャー」等

出演・講師：塩崎おとぎ紙芝居博物館

講演会「街角の子ども文化～紙芝居の歩みと今日的意義～」

講師：畑中圭一（童謡詩人、児童文学研究者）

対 象：実演/どなたでも 講演会/中学生以上

定 員：80名（講演会は事前申込先着順）

参加費：無 料

共 催：大阪府立中央図書館 国際児童文学館／大阪国際児童文学振興財団

協 力：一般社団法人 塩崎おとぎ紙芝居博物館

お申し込み、詳細は ↓↓

<http://www.library.pref.osaka.jp/site/jibunkan/kamishibai2014.html>

● 「第31回 日産 童話と絵本のグランプリ」作品募集

アマチュア作家を対象とした創作童話と絵本のコンテストです。構成、時代などテーマは自由で、子どもを対象とした未発表の創作童話、創作絵本を募集しています。締め切りは10月31日（金）です。詳細は↓↓

http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/02_nissan/index.html#31boshu

● 研究紀要の原稿募集

当財団では「大阪国際児童文学振興財団 研究紀要」第28号の原稿を募集しています。お申し込み、詳細は ↓↓

http://www.iiclo.or.jp/06_res-pub/04_journal/boshu.html

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いします。

お申し込み、詳細は → <http://www.iiclo.or.jp/donation.html>

【2】コラム

《1》 Y O ! この本読んだ? Yasuko's & Okiko's Talk

『ウェストール短編集 真夜中の電話』 ロバート・ウェストール/作

原田勝/訳 宮崎駿/装画 徳間書店 2014年8月

対象年齢：小学校高学年以上

あらすじ：訳者が編んだ9作のウェストール短編集。1980年～死後出版された1997年までの作品を収録。浜辺で幽霊の少女に出会う思春期の男の子アランの物語（浜辺にて）、敬虔なキリスト教徒のアンジェラに恋した理屈っぽいサイモンとの恋物語（吹雪の夜）、目の見えないビルが殺人事件を推理する「ビルが『見た』もの」、墓守と幽霊たちが力を合わせて邪悪な者に向かう「墓守の夜」などが紹介されている。

○：ウェストールは、1993年の死後もイギリスで著書が出版され続け、読まれています。多くの珠玉の短編を残しているので、その短編集は待望のものでした。

Y：日本では、『“機関銃要塞”の少年たち』（評論社）『海辺の王国』のような戦争もの、思春期の心理を描いた『かかし』、幽霊を描いた『クリスマスの幽霊』（ともに徳間書店）など、数多く翻訳され、人気が高い作家で、この短編集でも、戦争、思春期、幽霊はキーワードになっています。

○：ウェストールは最初、自分の息子のために戦争のことを伝えたいと『“機関銃要塞”の少年たち』をリアリズムで書きましたが、教師をしていて、戦争を知らない子どもにも伝わる手法として作品に「幽霊」を登場させることを思いつきました。それによって、読者を飽きさせず、迫力のある作品が次々と生まれました。

Y：私が一番印象に残った作品は表題作の「真夜中の電話」でした。電話で悩みを聞くボランティア団体のサマリタン協会の人にクリスマスイブの真夜中に女性から「あの人はわたしを殺す気よ。」という電話がかかってくるという作品です。どの場面も絵がはっきりと浮かんで来て、次の展開をかたずをのんで読み進めることができました。

○：作家自身がサマリタン協会で活動していたことがあったので、描写がとても具体的です。他の作品も同様ですが、いわゆるお堅いクリスチャンを揶揄しながら、その根底には、ヒューマニズムというか、宗教心というか、温かい人間性が感じられます。

お気に入りの「最後の遠乗り」（The Night Out）が入っていて、嬉しかったのですが、一冊の短編集としてみると、多くの短編作品から、どう選ばれたのかが、よくわかりませんでした。もう一冊出版されるので、期待し

たいところですよ。

Y：もう一冊の訳者の野沢佳織さんと徳間書店の編集者上村令さんと3人ですべての短編を読んで、それぞれの訳者が訳したいと思われるものを選ばれたようです。1作1作が短編だからこそその鮮やかな切り口があり、1冊にウェストールの魅力が詰まっている楽しさを感じながら読みました。

《2》 読書活動ボランティアのためのワンポイント 49

その9 おはなしを語る(2) 語るということ 1

おはなしを聞いていて、その世界にぐっと入りたいのに入れないと感じることがあります。いくつもの理由が考えられますが、最近、拒否の言葉や怒りをぶつけるような言葉は難しいと思うことが何度かありました。

「だめ!」「やめろ!」「あっちへ行け!」「出ていけ!」「許さん!」など、昔話には、ふだん人があまり使わない“乱暴な”言葉も頻繁に出てきます。登場人物の思いに寄り添ってこれらの言葉を語ると、迫力が出ておはなしがぐっと盛り上がるのですが、ふだんこれらの言葉を使わない人にとっては、おはなしの中であっても言うのが難しく抑えた表現になりがちで、拒否や怒りの感情が聞き手に伝わらないことがあります。

おはなしの中だからこそ、語り手が心と体を解放し、自分の殻を破って、拒否や怒りの言葉を言えたら、もっと楽しく、聞き手もその世界に入れるのになあと思います。

「語り」には結局、語り手自身の生き方や考え方が知らず知らずのうちに表出しており、豊かな語りは人生経験や感性とつながっていることを示していると思います。そう考えると語ることに怖くなりますが、一方で自分の生き方を高めようと努力しながら一方で開き直っておはなしに身を預け、語ることに、「おはなしを語る」ということだと思っています。

*次号は「その9 おはなしを語る(2) 語るということ 2」の予定です。質問や意見をいただきましたら、お答えしていきたいと思っています。(Y)

《3》 サイト紹介 ー子どもの本をリサーチするー

一次資料データベース篇 29 回目。ご紹介するのは以下のサイトです。

● 広島市立中央図書館 鈴木三重吉と「赤い鳥」の世界

<http://www.library.city.hiroshima.jp/akaitori/index.html>

鈴木三重吉は、漱石門下の小説家で、芥川龍之介の兄弟子として知られています。しかし、その作品を知る人は現在では少ないのかもしれませんが。

一方、雑誌「赤い鳥」は、大正期を代表する児童誌です。大正7年に創刊、昭和11年の三重吉の死による廃刊に到るまで、全196冊を世に送り出しました。その影響は大きなもので、「童話」「金の船」「おとぎの世界」などの

競合誌を登場させただけでなく、芥川や有島武郎の童話、北原白秋の童謡、清水良雄の挿絵などが誌面を飾り、大正期の童心主義文学隆盛の礎となりました。坪田譲治や新美南吉ら、既成作家ではない新人がこの雑誌から育っていったことも見逃せません。

この雑誌を主宰したのが三重吉です。編集者として諸作家に作品を依頼し、「蜘蛛の糸」や「一房の葡萄」童謡「かなりや」などの名作が生まれました。同時に自らも筆を執り、主に西洋の説話、日本の古事記などを翻訳紹介しています。

サイトでは、これら三重吉と「赤い鳥」に関わるさまざまな情報を掲載。三重吉による自筆原稿や愛蔵書の紹介をはじめ、「赤い鳥」のポイント解説、作家の総索引などが掲載されています。また、「WEBで読もう」は、「赤い鳥」誌上の名作そのものを読めるコーナー、「表紙画ギャラリー」は、同誌196冊の全表紙を見ることができます。

大正から昭和にかけて、童話を書かなかった文学者はいないと言われる。その舞台を用意し、今日に残る名作を生み出した三重吉と「赤い鳥」の世界、一度のぞいてみませんか？（J）
※次号は、一次資料データベース篇〈その30〉の予定です。

《4》 行って来ました！

大阪梅田のグランフロント北館ナレッジキャピタルで開催されている「生誕80周年記念 藤子・F・不二雄展」に行ってきました。

最初のコーナーは「SF（すこしふしぎ）シアター」で、映像を見ながら、タイムマシンに乗ってドラえもんたちと冒険の旅をしている気分を味わえるコーナーです。室内型4Dプロジェクションマッピング（立体物にぴったり合うように映像を投影し、その映像によって、その物が動いたり、光ったりする技術）で、仕事机からキャラクターが飛び出したり、本当に冷たい風が吹きつけてきたりします。

次に「原画の部屋」に進みます。1951年のデビュー作「天使の玉ちゃん」から、「オバケのQ太郎」「ジャングル黒べえ」「パーマン」「ドラえもん」など、主に第1話の原稿が展示されています。キャラクターたちの登場のエピソードや、元々Q太郎の髪の毛は3本でなく10本だったことなどがわかり、思わず読みふけてしまいます。

藤子・F・不二雄作品に出てくる不思議な道具はとてもユニークですが、1960年に描かれた「てぶくろてっちゃん」の手袋と「ドラえもん」のハサミは、それを使って紙を折ったり切ったりすると、本物になるという類似点があるのです。なるほどと納得してしまいました。

「オバケのQ太郎」と「パーマン」の白黒アニメの映像も見ることができました。また、少年時代に、のちに藤子不二雄としてコンビを組むことになる安孫子素雄と作った手描きの雑誌「少太陽」もパネルで展示されていました。

全て手描きにもかかわらず、まるで本当の雑誌のように、画風や内容の違うマンガや、口絵や広告などが入っており、回し読みされたあとも残っていました。

最後の「なりきりキャラひろば」では、パーマンになって荷物を持ち上げたり、のび太の机の引き出しから頭をのぞかせたり、のび太のおばあちゃんにひざまくらしてもらったりして自由に写真が撮れます。大人も子どもも順番待ちで楽しんでいました。(K)

【3】全国のイベント紹介

●「森とともにだちになろう！ー森の絵本づくりー」

貝塚市にある自然いっぱい少年自然の家で、森の散策・自然の素材探し、自分だけの絵本づくりを楽しみます。

講 師：土居 安子（大阪国際児童文学振興財団 主任専門員）

月 日：10月4日（土）～5日（日）1泊2日

対 象：幼稚園年長～小学生を含む家族、小学生以上は子どもだけの参加可

定 員：10家族または子ども30人まで

参加費：有料 申込み：必要（申込先着順）

主 催：大阪府立少年自然の家

協 力：大阪府立中央図書館 / 大阪国際児童文学振興財団

● 大阪府子ども文庫連絡会 公開講座

やっぱり図書館が大事 Part23 「読書と図書館の楽しみ」

講 師：阿刀田 高（山梨県立図書館館長、作家）

日 時：10月7日（火）午前10時～12時 講演会 午後1時～3時 交流会

会 場：大阪市立中央図書館（大阪市西区北堀江）

参加費：無料 資料費：実費 申込み：不要

主 催：大阪府子ども文庫連絡会

● 講演会「こどもの心の秘密を探るーバーネットの自伝とその作品の関係」

『バーネット自伝 わたしの一番よく知っている子ども』（翰林書房）出版記念

講 師：三宅 興子（大阪国際児童文学振興財団 理事長）

日 時：10月19日（日）午後2時～3時30分

会 場：教文館 9階ウェンライトホール（東京都中央区銀座）

定 員：100名

参加費：1,000円 申込み：必要

主 催：ナルニア国

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

【4】プレゼント
